

った。だが、限られた紙数では書き尽くせぬ数々の苦難、そして死線を越えることの出来た幸運は生涯忘れ得ない。

かつてこの大戦を、単に軍部の暴挙とのみ見ることを私は好まない。それはさておき今、日本は、世界一の経済大国。長寿国といわれている。大戦によって失われた尊い命は申すまでもなく、幸運にも生き残った我々こそ、今日の平和で豊かな日本を築いた礎であるとの誇りを持ち、残された人生をさらに意義あらしめんためにも、精一杯生きて行かねばならないと思う。

## 軍国一色青少年時代回想記

愛媛県 中川 啓 夫

私は大正前期に生れ、六十九歳で、子供五人、孫五人あり、今の社会でいう高齢者に編入しました。

昭和七年一月上海事変勃発、その頃より非常時という言葉を耳にするようになり、小学校の運動会にも軍

事教練が取り入れられ、中隊、小隊の訓練をしました。軍国主義の歩みは日一日と高まり下校して家に帰ると近所の友達四、五人集まれば兵隊ゴッコが始まり、男子として生を受けしことを誇りに思ったものです。

昭和十二年七月支那事変勃発、在郷軍人に召集令状が来るようになり入営兵士、召集兵士を万歳歓呼の声で送ったものです。歌は世につれ、世は歌につれと申しますが「勝つて来るぞと勇ましく」の軍歌を、元気一杯歌い見送ったものです。

昭和十三年頃になりますと勇ましく送りし勇士の無言の凱旋が始まりました。歌は「軍国の母」……生きて帰ると思うなよ白木の箱が届いたら……。悲しみの中にも勇氣百倍、今度は僕達の番だと意気高揚しました。

昭和十四年五月ノモハン事変勃発、親族にも元陸軍航空准尉辰己清重氏も空中戦にてノモハンの華と散りました。その頃、海軍航空隊を讃える歌は、

密雲低くたれこめて、

古都南京の暗き空、

突如と起こる爆音は、

ああ我が海軍の爆撃隊

その頃になりますと若き血は燃えて、いてもたってもたまらない気持ちでお国のためと思い、昭和十四年、広島海軍工廠に入廠すべく試験を受け、合格通知と共に入廠。桜に錨の帽章を付けた時の喜びは今でも忘れざる思い出です。

一カ月の基本教育を受け航空機部に編入され、当時九七式艦上攻撃機の組み立てで多忙を極めました。週に二日は廠内の青年学校にて訓練を受ける。訓練はすべて海軍式（海軍下士官の指導）でした。それもその筈、廠長海軍少将、各工場長は海軍大佐という顔ぶれでした。工員三万人とのこと。昼休の時間に海岸に出ると、前は広島海軍航空隊で水上機の発着の訓練、高等飛行、空中戦などの猛訓練の毎日でした。これを見て私達若者は奮起せざるにはおれませんでした。この五尺の身命を国に捧げる覚悟が出来ました。

昭和十五年十二月退廠、昭和十六年陸軍に志願し、甲種合格で、昭和十七年二月十日関東軍要員として西

部三十三部隊（徳島）に入営の日を待ちました。

その間、昭和十六年十二月八日真珠湾奇襲攻撃。米英に対して宣戦布告、日本軍の各戦場における戦果の大本営発表のラジオニュースを耳にする明け暮れの毎日でした。

時期到来、前記部隊に入隊すべく昭和十七年一月九日、村民多数のお見送りを戴き、お別れの挨拶の中で「海行かば」を高唱し、別れを告げ、故郷を後にしました。

十日午前九時入隊、第二機関銃中隊福見隊に編入され陸軍二等兵となる。いよいよ兵隊としてのすべての基本教育が始まりました。銃器の分解、組み立て操作、内務行事などに秒を争う毎日で一日の日の長さ。十日も過ぎる頃には整列ビンタもそここに始まる。

四月、一期の検閲を終え、満州百六十六部隊二十大隊一中隊に轉属のため、思い出深き徳島三十三部隊を後にする。時に四月二十八日。五月五日前記中隊（佐藤隊）に編入された。三年兵石川県、二年兵山形県、初年兵愛媛県という編成の中、同郡同町の者等おらず、

愛媛県東宇和郡では私ただ一人という有様で、現役ばかりの部隊（独歩）でありました。

編入の記念写真を撮り、中隊全員の会食となり、終つて気長く一服しておりましたところ、急に古年兵の悪さが始まり、「初年兵さんよ南国四国から来て南方ばけするなよ」との口上と共に食器もろとも机がヒックリ返され、内地よりまだまだ酷い仕打ちを受ける。

このようなことにも負けず、戦場において勇猛果敢に行動をすることのできる根性作りだと考え、腹もたてずひたすら軍務に精進致しました。

私も昭和十八年二月三日下士官候補者となり、関東軍歩兵科第一下士官候補者隊（旅順）に入隊、分隊長としての教育を受け、南洋第二支隊臨時編成（甲）下令により原隊（寧安県横道河子）に帰りました。

昭和十八年十二月一日陸軍伍長に任ぜられ、南洋第二支隊第二大隊第四中隊第一小隊の連絡係下士官を命ぜられた。昭和十八年十二月三日北滿横道河子を後にし一路南方へと向かう、その間、洋上三十日、昭和十九年一月三日南洋委任統治領クサイ島に着く。

上陸してまず二十日間は平穏な毎日でありました。

それも束の間、B 24の飛来となり、銃爆撃の繰り返しの毎日となる。これにも慣れて、我が命、今日も残りしやと思うようになりました。食糧も無く、爆弾投下、機銃掃射を受けた後、浜に出て魚拾い、海へビ、山に入りてはシダの芽、タライモ採りという原地自活生活が始まりました。何一つの補給も無く勤務以外は軍服も着用ならず、裸一貫、もちろん素足で階級章は禪の紐に判任官二等陸軍軍曹であります。

島には何万本とある椰子の実も自由に採ることも出せず、統制物資となり、監視の目は次第に厳しく、監視に監視がいるという有様である。これを乱したる者は免官降等の厳しさである。そのうち兵隊と夜は隠密破壊攻撃を行うという喜んで、その準備をする（カラオの網にて椰子の実を吊り下げる）。今日の作戦は強行突破である（爆撃投下に合わせて椰子の実をす早く蹴り落す）。このように上司の目をかすめ悪いこともしました。背に腹は替えられないのたとえ、我れに腹一杯のお米のご飯が食べられたら、この命に何の未

練も無いと一様に答える兵隊達であった。

命長らえて、昭和二十年十一月二十九日奮戦苦闘の島クサイ島を後にする。

昭和二十年十二月浦賀港上陸復員しました。花の青春クサイで暮れて今じゃ故郷でお百姓です。

次に平成元年世界平和を祈念して作りし歌を披露し  
まして筆をおきます。

平成の世に、四方の海原 浪立てず

天津国々 幸ぞ多かれ

幾万の英霊に対し、ご冥福をお祈りいたします。